

頑張る

農業法人

「茶の担い手を育てない」と、綾部の茶もなくなら

ば、との危機感から法人を立ち上げた」と語る綾部市位田町の(有)両丹いきいきファーム代表取締役の中田義孝さん(61)。

2003年8月に茶生

産農家6人で法人を設立、今では管理茶園4畝で産地維持に努める。

今年の第65回全国茶品評会「かぶせ茶の部」で、

1等3席の日本茶業中央会長賞を受賞。中田さん自身も4度目となる1等

1席の農林水産大臣賞を受賞する高品質茶を生み出し、綾部市も全国で最優秀の市町村に与えられる産地賞に輝いた。また、今年から法人経営の安定・発展を目指し、京のブランド産品・黒大豆枝豆「紫ずきん」の生産

にも取り組んでいる。

綾部市では1935年から、府の奨励で茶栽培を始め、その後最盛期の65年ごろには100畝以上、生産者も約450戸になるなど、茶の一大産地に発展した。

しかし、市場経済状況の変化や高齢化などで、栽培面積、生産者は徐々に減少。2000年ごろには面積が最盛期の75%減、生産者も80%減と、茶産地として危機的状態になった。

20歳から就農し、茶業2代目となった中田さんは危機感を強め、当時の市茶生産組合連合会長の村上朔生さん(72)に「休耕茶園を管理する組織が必要」と働き掛け、01年に同社の前身となる任意組織「両丹いきいき

綾部市

(有)両丹いきいきファーム

乗用機で茶樹の整枝をする中田さん



今年から栽培した「紫ずきん」の出荷作業に励むスタッフ(左が中田さん)



茶産地の保全・発展へ

「紫ずきん」を栽培 今年から複合経営

ファーム」を4集落の6人で結成した。活動の第一歩として、10㍏の茶園の管理を受託したが、「任意組織では経営感覚が不十分。このままでは綾部の茶が衰退する」と、2

年後に6人が出資し、法人化した。現在、中田さ

んの他に取締役2人、監事役1人。正社員1人と臨時社員1人。

同社が管理する休耕茶園は、当初の1畝から現在では4畝に拡大した。乗用摘採機などの導入で効率化を進め、収穫茶葉

は、共同製茶工場などで、かぶせ茶やてん茶に加工する。JA京都にのくに茶業センターを通じ、JA全農京都に出荷してい

る。中田さんは「茶樹に力がないと良いものができない」と病害虫防除、肥

培管理、土壌条件の向上などに手間を惜しまず、同社も個人も各種茶品評会で受賞が絶えない。今年から茶の農閑期に新たな農作物を導入し、経営を発展させたいと、JAの指導で「紫ずきん」の栽培を始めた。2畝で極早生品種から晩生品種までの連続栽培に取り組む。

「人件費、機械費などの経費は掛かるが、まずまずの手応えを得られた」と、中田さんは複合経営に前向きだ。「来年には府立農業大学校卒業生を雇用し、新たな担い手育成の場にした」と考えている。また、「茶を中心とした農産物を使い、加工・販売の6次産業化も目指し、栽培面積を増やして、若い後継者を育てていきたい」と力強く語る。

▽法人の所在地 綾部市位田町岡倉88の1。▽電話 0773(21)4091。